



存在と記憶
の距離感

オパール
第三話

初めて蘭と会った日、今僕はその日の事を思い出そうとしている。なかなか「はっきり」と「克明に」、という訳にはいかないのだけれども、その日は太一と真希と一緒に遊ぶことになっていた。という事は既に正平がいなくなっていて、まだ太一がいなくなる前のある日の事なんだろうけど、時系列に関しての記憶があいまいで確信は持てない。唯まあ、思い出なんてそんな程度のものなのだろう。

でもとにかく、その日は三人で遊ぶことになっていて、授業中に真希から「私の従妹と一緒に遊びたいって言ってるんだけどいい？」という旨のメールがあって、急遽その従妹を含めた四人で遊ぶことになったのだ。いつもの様に、授業が終わってから新大久保駅の改札口の前で待ち合わせていた。改札口に着くと、真希は先に到着して僕達を待っていた。

「おっす。」

「オッス、遅かったじゃん。」

挨拶を交わして、「あれ、従妹が来るって言ってなかったっけ。」と思ったら、真希の後ろにチョココンとくっついている女の子がいる。モジモジしている、そんな感じで黙って立っている。

「あ、この子があたしの従妹で蘭っていうの。よろしくね。」

真希が紹介する。

「あ、よろしく。」

僕も太一もそれに応じて挨拶した。歳は僕等の一つ下の十五歳だそうだ。真希に紹介された蘭はそれでもまだモジモジしていて、コクッと小さく頷くだけだった。

蘭の見た目は、ストレートの黒髪で前髪を真直ぐに切りそろえていて、ちょっとヘルメットみたいだな、と思った。パッチリと大きな目をしているんだけど、上目づかいだからかな、オドオドしている小動物みたいな、そんな印象を受ける。体系はポッチャリである。ただ、これは僕が常日頃から思っている事なのだけれど、「ポッチャリ」とはどの辺までをポッチャリというのだろうか。「ポッチャリ」と書くとそれを読んだ人によってかなり印象が変わってくるのではなかろうか。ある人から見ればポッチャリでも、それをまた別の人が見ればデブだと思えるかもしれない。かなりその線引きが難しい言葉である。そして、僕は肉好きのよい女の子が嫌いではない、いやむしろ結構好きなのかもしれない、という事を言うておかなければならない。蘭はそんな僕が見れば、かなり境界線に近い所にはするものの、やはりポッチャリとした女の子であった。でも、全体的にみればちょっと可愛いと言えなくもないな、と思

った。ちなみに、そういう観点からすると、真希はどちらかと言えばデブの部類に入ると言わなければいけないのかもしれない。

その日はその後、高田馬場の駅ビルでボーリングをして遊んだ。僕はボーリングはあまり得意ではなくて、その日のスコアは100点前後だった。太一はサッカーをしていたり、運動神経が良く、ボーリングも上がった。140点ぐらい取っていたと思う。真希と蘭は、うまい下手以前の問題で、ガーターを連発してボーリングになっていなかった。10点とか、それぐらいのスコアだったと思う。

僕は無邪気な少年だったから、すっかりゲームに熱中して、蘭ともいつの間にか打ち解けた気になって、戻ってきたボールを取ってあげたり、そういうちょっとした瞬間に「もう馴染んだでしょ」的な空気を出してみたりしたのだけれど、蘭の方は相変わらず恥ずかしがっているというのか何というのか、モジモジとしていて、ほとんど言葉を発しなかった。それでいて、何やらコソコソと小声で真希に話していた。真希の方は蘭のそういう人見知りには慣れている様子で、気にする風もなく快活にボーリングを楽しんでいた。

その日は終始そんな感じで終わった。だから、僕の第一印象としては、蘭は大人くてあんまりしゃべらない子なんだな、あんまり面白くなかったのかな、という感じだった。つまりはあよく分からなかった。ただ、その日の帰り道に真希から

「お疲れ、蘭も今日は楽しかったって。また来たいって言ってるから、次も連れてくるね。」

というメールが来た。あんまり楽しそうには見えなかったけどなと思い、ますますよく分からなかった。

とまあ、僕と蘭との出会いはそんな感じだった。ほとんど話す事もなかったのも、蘭がどういう女の子なのか、という様な事も分からなかった。ただその後も一度、蘭は真希に付いてきて、四人で一緒に遊んだ記憶がある。その日は池袋でサンシャイン60の水族館に行った。昼間から遊んだ様な気がするから、土日か祝日かなんかだったのだと思う。入館料がやたらと高かった。

一緒に水族館を廻った事は覚えているのだけれど、具体的にどんな様子だったかはあまり覚えていない。確か、蘭はその日も打ち解けることなくモジモジとしていてほとんど話さなかった。ただ、その後蘭と付き合うようになったから彼女が僕に積極的にしゃべるといふ様な事はなかったから、もともとそういう女の子なのかもしれない。

そんな感じに、その日は記憶があいまいになってしまう様な、特にこれと言った事のない一日だったのだけれど、その中で一つだけ、鮮明に覚えている光景があるので書いてみようと思う。

水族館に入ったものの、水族館なんて魚に何の興味もない人間からすれば退屈極まりない場所だ。それでもまあ、せつかくお金を払ったんだからという気持ちもあり、色とりどりの魚達が水槽の中を泳ぎまわっている様子は「へえいろんな魚がいるもんだなあ」程度の感慨を与えてくれる。

僕と太一は順路に従って、水槽ごとに書かれている解説と実物を見較べて、「この解説はこの魚だろ。」

「いや、あれだろ。」

とか、

「あれ、この解説の魚見つからないよ。」

とか何とか言いあいながら、それなりに水族館を楽しんでいた。

一方で残りのお二方、真希と蘭は、最初のうちこそ

「へえ。」

とか言って水槽を見ていたけれど（蘭は言ってなかったけれど、見てはいたな）、もはや魚への興味は失せたらしく、二人で固まって何やらしゃべくりながら、僕等の後ろをついて歩いて来るだけになっていた。蘭に関して言えば携帯をいじっていた。

と、何やら二人で蘭の携帯を見ながら言い合いになっている。気になったので、一旦水槽から目を離し、

「どうしたの？」

と尋ねてみた。蘭はちらっと僕を見て、恥ずかしそうにチョコッと笑って、手に持っている携帯を見る。

真希が

「携帯の電池切れちゃったんだって。」

と教えてくれる。僕はちょうどちょっと前に学校の友達から電池を復活させる方法を教えてもらったばかりだったので、

「あ、電池復活させる方法知ってるよ。ちょっと貸してみて。」

と得意になって手を差し出した。蘭はちょっと迷ってから、僕に携帯を渡した。僕は充電電池の端子の部分に息を吹きかけるといいと教えてもらっていたので、（ファミコンソフトでもそうだけど、ほとんどおまじないレベルの迷信を人はなぜ真に受けしてしまうんだろうと、今でも不思議だ）蘭の携帯の電池カバーを開け様と試みた。とその瞬間、蘭が

「あ。」

とビックリした様に声をあげた。僕は何が起こったのか分からずにキョトンとしてしまった。が、蘭の携帯に目をやって状況を理解した。

蘭の携帯の充電電池には大きなプリクラが貼ってあって、そのプリクラの中では蘭と男の子が接吻をしていた。僕はビックリして即座に電池カバーを閉じた。

「ご、ごめん。」

そう言って蘭に携帯を返した。僕としては（僕としなくてもそうだろうけど）まずいことしちゃったなあ、と思い、非常に気まずかった。蘭はとても恥ずかしそうな、「まずいもの見られちゃったなあ」という様な表情で、でもいたずらっぽくチョコッと笑っていた。

この一連の光景だけは鮮明に覚えている。接吻プリクラを見てしまった時のまずったなあ、という焦りというか恥じらいというか、感情が大きく起伏した一瞬だったから覚えているんだと思う。そして、ずっとモジモジと人見知りをして、その実を内に秘めていた蘭の人っぽさというか、そういう部分が初めてチョコッとだけ、表に出てきた瞬間だったからだろうと思う。

その後、四人で遊んだ記憶はない。だから暫くはまったく接触のない期間があったと思う。ちょうどその頃（15歳、中学3年生の終わりごろだと思う）、僕は柔道部に入部して忙しくなり、蘭はおろか、真希ともほとんど連絡を取っていなかった様に思う。だから、この二回の交友で蘭が気になったとか、好きになっちゃったとか、そ

ういった事はまったく無かったのだと思う。ほとんど会話を交わす事もなかったのだから、当然と言えば当然である。

そして暫くの時を置いて、蘭との次の記憶は16歳の春、突然に再開する。

存在と記憶の距離感 第三話

<http://p.booklog.jp/book/20563>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20563>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20563>